

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	Kids/ハミング放課後等デイサービス		
○保護者評価実施期間	2026年5月20日		～ 2026年5月28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数) 7
○従業者評価実施期間	2026年5月20日		～ 2026年5月28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 6
○事業者向け自己評価表作成日	2026年5月27日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	両面における安心・安全な受入体制の確立 施設内にエレベーターなどのバリアフリー設備を完備しており、肢体不自由や重度の脳性麻痺を抱える児童様であっても、移動の負担や転倒リスクを最小限に抑え、安全かつスムーズに通所できる体制を整えています。	室内スペースの制限を克服するため、近隣の公園や地域の体育館といった外部施設を積極的に開拓し、イベントカレンダーに「外遊び・体育館利用日」を計画的に組み込んでいます。これにより、安全な環境下で児童様がアグレッシブに身体を動かせる機会を確保しています。	関係機関(学校・相談支援事業所)との「個別的教育支援計画」等との連動性をさらに高めるため、定期的な情報共有と一貫した支援体制の構築を図ります。また、ご家庭での様子や保護者様のご要望をより密に面談や連絡帳にて伺い、事業所内だけでなく、児童を取り巻く環境全体で安心・安全に成長を支えられるよう、連携協力を深めてまいります。
2	家庭に寄り添う柔軟な送迎対応とレスパイトケアの実践 保護者様(特にお母様方)の就労状況や生活リズム、突発的なご要望に最大限寄り添い、柔軟な送迎時間枠(レポートリ)を構築しています。これにより、単なる通所手段の提供に留まらず、ご家庭のレスパイト(休息)や子育て負担の軽減、心理的安心感に大きく繋がっています。	室内における「構造化」の徹底と安全な教材への工夫 室内活動においては、パーテーション等を用いて「静かに過ごすエリア」と「軽く身体を動かすエリア」を明確に区切る(空間の構造化)工夫を行っています。また、使用する道具もウレタン製などの柔らかい素材に限定したレクリエーションを考案し、脳性麻痺等の児童様の安全を守りつつ、双方のニーズを最大公約数で満たす環境づくりを徹底しています。	児童がより安心・安全に、かつ主体的に過ごせるよう、事業所内の環境構成(感覚刺激の調整や動線の確保)の見直しを継続的にを行います。あわせて、職員の専門性向上(特性理解や強度行動障害、接遇・コミュニケーションに関する内部研修の実施)を図り、どの職員が対応しても一貫した質の高い専門的支援が提供できる体制を維持・強化してまいります。
3	児童の主体性と社会性を育む「日替わりイベント」の提供 学校帰りの児童様が放課後の時間を心から楽しみ、喜んで参加できるよう、毎日異なる企画(日替わりイベント)を立案・実施しています。「イベント月間カレンダー」を事前に共有することで、児童様同士が「次はこれがやりたい」「みんなで協力しよう」と自然に話し合う環境が生まれ、人間関係・社会性の向上(5領域の視点)に繋がっています。	家庭では体験が難しい「調理実習(お菓子作り)」や「流しそらめん」、夏期の「施設内プール」といった五感を刺激する体験型イベントをただ「楽しかった」で終わらせない取り組みをしています。これらの活動が5領域(健康・生活、運動・感覚、認知・行動、言語・コミュニケーション、人間関係・社会性)のどこにアプローチしているかを職員間で明確に言語化・共有し、児童一人ひとりの「個別支援計画書」の目標達成に連動させる体制(アセスメントとモニタリングの強化)を今以上に推進していきます。	児童が主体的に選択できる日替わりイベントや体験型活動を通じ、新基準に基づく「5領域」との関連性を明確にした支援を深化させます。児童本人の「意思決定支援」の視点に基づき、日々の活動における選択機会(意思表示の場)を確保するとともに、活動中における本人の微細なサインや表された意向を「ケース記録(日報)」や「アセスメントシート」へ確実に記録・反映します。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	多様な障がい特性(静的・動的ニーズ)の共存における空間的制限 当施設には、脳性麻痺などを抱えゆったりと静かに過ごしたい児童様から、身体を思い切り動かしたい、あるいは球技(ボール遊び)などのアグレッシブな活動をお好む児童様まで、非常に多様な障がい特性を持つお子様が通われています。そのため、限られた室内空間の中で、車椅子等の安全な動線を100%確保しつつ、同時に激しい運動やボール遊びを完全に保障することが空間構造上、困難である点が課題です。	限られた室内空間において、車椅子利用児の安全な動線確保(静的エリア)と、活動的な児童の運動スペース(動的エリア)を物理的に常時完全分離することが構造上困難であるため。また、時間帯ごとの空間の有効活用やレイアウトの工夫が標準化されていないこと。	可動式パーテーションやソフトブロック等を導入し、活動内容に応じて空間を柔軟かつ視覚的に区切る(構造化)。「児童の安全を守るため、スケジュール管理によるメリハリある活動展開を徹底します。アクティブな運動時間と、落ち着いて過ごす時間の切り替えを手順化し、全スタッフが共通認識を持って見守り・誘導を行うことで、室内での接触事故ゼロと安全な動線確保を目指します。」
2	不意の衝突・ケガのリスク管理に伴う活動の制限 静的に過ごしたい児童様と、動的にアグレッシブに動きたい児童様が同一空間に混在することにより、不意の衝突や転倒といったケガのリスクが高まります。安全第一を最優先とする結果、室内での過度な球技や激しい運動を一定制限せざるを得ず、活動的な児童様の「思い切り身体を動かしたい」という欲求を十分に満たしきれないジレンマが生じています。	児童が同一空間に混在することによる突発的な事故リスクを懸念するあまり、一律の活動制限(球技の禁止など)に頼ってしまい、活動的な児童の「思い切り動かしたい」という欲求を充足させる代替案の検討が不足している。	安全な柔らかい素材(ウレタンや風船等)を使用した球技プログラムへの代替や、近隣の公園・体育館等の外部資源を積極的に活用した「屋外動的活動」の定期化を図る。衝突リスクが高いエリアの「危険予測」を徹底することで、制限ではなく「安全な場所」へ転換する。
3	職員の配置バランスとリスクマネジメントの高度化 多様なニーズ(重症児対応と行動障害・多動対応など)に同時並行で対応するためには、職員の高度な目配りと、時間帯に応じた緻密な人員配置が求められます。常に緊張感を持った体制維持が必要とされる点が事業所としての課題です。	重症心身障がい児対応、行動障がい、多動対応など、同時並行で発生する多様なニーズに対し、職員のスキルや経験値に依存した人員配置になっており、時間帯ごとの「メリハリのある緻密な役割分担」が組織としてシステム化されていないため。	児童の登所スケジュールに合わせ、時間帯ごとの「職員配置シミュレーション(誰がどの児童・エリアをメインに担当するか)」を毎日の朝礼で可視化・共有する。さらに、リスクマネジメントや行動障害に関する外部研修を定期実施し、全職員が目配りと、緊張感を持ったチームケアを提供できる体制を標準化する。